

顕彰状

秋山駿氏は、1930年4月23日東京池袋に生れた。若き日の東京大空襲と敗戦は、氏の社会と人間を見る眼を養う決定的な体験となった。戦後、旧制第二早稲田高等学院に入学しさらに新制早稲田大学第一文学部に進み、1953年に早稲田大学第一文学部文学科仏文学専修を卒業した。

氏は1956年に報知新聞社に入社し、そのかたわら文藝批評の筆を執り、1960年5月「小林秀雄」で文藝評論家の登竜門である第3回「群像」新人文学賞・評論部門を受賞し、文藝評論家としての第一歩を歩み始めた。その後雑誌「批評」の同人となり、1963年からは、丹羽文雄主宰の雑誌「文学者」で旺盛な評論活動を開始した。その連載の中で、小松川女子高生殺人事件をめぐって「想像する自由」を、ドストエフスキイを対象として「イッポリートの告白」を書き、従来の文藝評論の枠を超えた柔軟で奥深い思考を展開した。それらを収録した1967年出版の第一評論集は『内部の人間』と名付けられたが、その命名には現代人の精神状況を考察する秋山氏の深い思いが込められており、戦後の批評に重い位置を占める業績となっている。

1968年には「三田文学」誌上の連続インタビューで、文壇第一線の作家や評論家に鋭く迫る力量を見せ、1969年からは復刊「早稲田文学」の編集委員を務め、連載「歩行と貝殻」を執筆した。『無用の告発』(1969年)『抽象的な逃走』(1970年)をはじめとする評論集には、重厚だが躍動感のある精神の展開が垣間見える。氏の批評の文章は、観念に走らず、言葉を少しずつつむいでいき、人間への奥深い考察に達しており、さまざまな知的流行に追われる現代において、新鮮であり貴重である。小林秀雄や中原中也を論じた作家論・詩人論から新しいスタイルの人生論風のエッセイ、そして織田信長など歴史上の人物をも対象とする幅の広さは、当代の評論家の中でも際立っており、最近の長篇評論『私小説という人生』(2006年)にも、作品へのあくなき追求に根差した鋭い考察が随所にうかがえる。

氏は1990年に伊藤整文学賞、1996年に野間文藝賞、毎日出版文化賞を受賞し、1997年に評論家として日本芸術院会員にも選ばれている。

秋山氏は「早稲田文学」への尽力の他、早稲田大学第一文学部の文芸専修草創期にて「批評」の授業を担当するなど、本学の文芸の分野へ多大な貢献をした。早稲田大学の文学的伝統を継承するとともに、日本の戦後批評に独自の新しい文学的領野を開拓した氏の功績は本学の誇りである。

ここに早稲田大学は、秋山駿氏の功績をたたえ、早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2007年3月25日

早稲田大学